

令和2年度 改訂

学力向上

# 大島の教育 Pamphlet 1

奄美のよさを生かした活力ある教育の充実

## 授業充実の3ポイント

～「質の高い授業」づくりのために～



令和3年1月  
大島教育事務所

## 目 次

大島の教育 Pamphlet 1 ダイジェスト版	1
I 「質の高い授業」の実現を目指して	2
1 授業づくりで大切にしたいこと	2
2 「質の高い授業」とは	2
II 授業充実の3ポイント	3
ポイント1 目標の明確化	4
ポイント2 山場の工夫	5
ポイント3 確かめ・見届け	6
III 授業を生き生きとしたものにする工夫	7
1 児童生徒の具体的な姿による目標の設定	7
2 指導と評価の一体化	8
3 机間指導の工夫	9
3 生き生きと対話させる工夫	10
4 教師の聴き方・発問等の工夫	11
5 振り返りのさせ方の工夫	12
6 「書く活動」を重視した授業づくり	13
【引用・参考文献】	15

## 授業充実の3ポイント ～「質の高い授業」づくりのために～

(授業前)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習目標の具体化                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単元(題材)の系統を踏まえて</li> <li>・ 児童生徒の実態を把握して</li> </ul> </li> <li>○ 学習目標の達成状況を把握する判断基準の設定                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ねらいを明確にして</li> <li>・ 個に応じて</li> </ul> </li> <li>○ 児童生徒の姿を想定した授業構想                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童生徒の思考や対話をシミュレーションしながら</li> </ul> </li> </ul>
-------	---

【主な学習活動と指導の流れ】

【教師の手立て】

(ポイント1) 目標の明確化	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 興味関心が生まれる導入                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「学びたい」「してみたい」を引き出す</li> </ul> </li> <li>2 課題(問題)意識の焦点化                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「分からないこと、知りたいこと」を絞り込ませる</li> </ul> </li> <li>3 学習課題(問題)・めあての設定                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「分からないこと、知りたいこと」を可視化させる</li> </ul> </li> <li>4 解決の予想と見通し                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 解決を予想する</li> <li>・ 解決の方法と順序を確認させる</li> </ul> </li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 効果的な教材教具の活用                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ モデル(よいモデルや改善の余地のあるモデルなど)を提示する</li> <li>・ ICT を効果的に活用する</li> </ul> </li> <li>○ 焦点化を図るための「もう一手」の挿入                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事象提示, 体験活動(実際に問題を解く, 実演など), 既習事項との比較等で気付かせる</li> <li>・ 矛盾する点を提示するなど探究心のわく発問をする</li> </ul> </li> <li>○ 問題解決的な学習にするためのめあて(疑問形)の設定</li> <li>○ 教師と児童生徒, 児童生徒間における「ロールメゾ」の共有                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童生徒が必要と感じる言語活動の形態(ペア, グループなど)を設定する</li> <li>・ 解決の方法や順序を提示する</li> </ul> </li> </ul>
----------------	--	--

開始 10 分以内の導入

(ポイント2) 山場の工夫	<ol style="list-style-type: none"> <li>5 自力解決による最初の考え(仮説)の構築                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の考えを確実にもたせる</li> </ul> </li> <li>6 考えの共有(学び合い)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の考えを伝えさせる</li> <li>・ 他人の考えを受けとめさせる</li> <li>・ 自分の考えが変容(強固・付加・修正)していることを実感させる</li> </ul> </li> <li>7 自力解決による最終的な考えの構築                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の考えが変容(強固・付加・修正)したことを確認させる</li> </ul> </li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 最初の考えを可視化する活動の設定                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ねらいに即して「書く活動」を位置付ける</li> <li>・ 根拠を基にした理由付けを徹底させる</li> </ul> </li> <li>○ 指導内容に応じた言語活動の設定                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 根拠を基にした理由付けをした話し方を意識させる</li> <li>・ 自分の考えと比較しながら聞かせる</li> <li>・ 全員が主体的にかかわれる仕掛けをする</li> </ul> </li> <li>○ 最終的な考えを書く活動の設定                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 根拠を基にした理由付けを徹底させる</li> </ul> </li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 思考を促す聴き方, 発問</li> <li>○ 思考の過程が可視化される構造的な板書</li> <li>○ 指示・説明の精選</li> <li>○ 児童生徒の思考を支援する机間指導</li> </ul> </div>
---------------	---	--

ラスト 10 分間の充実

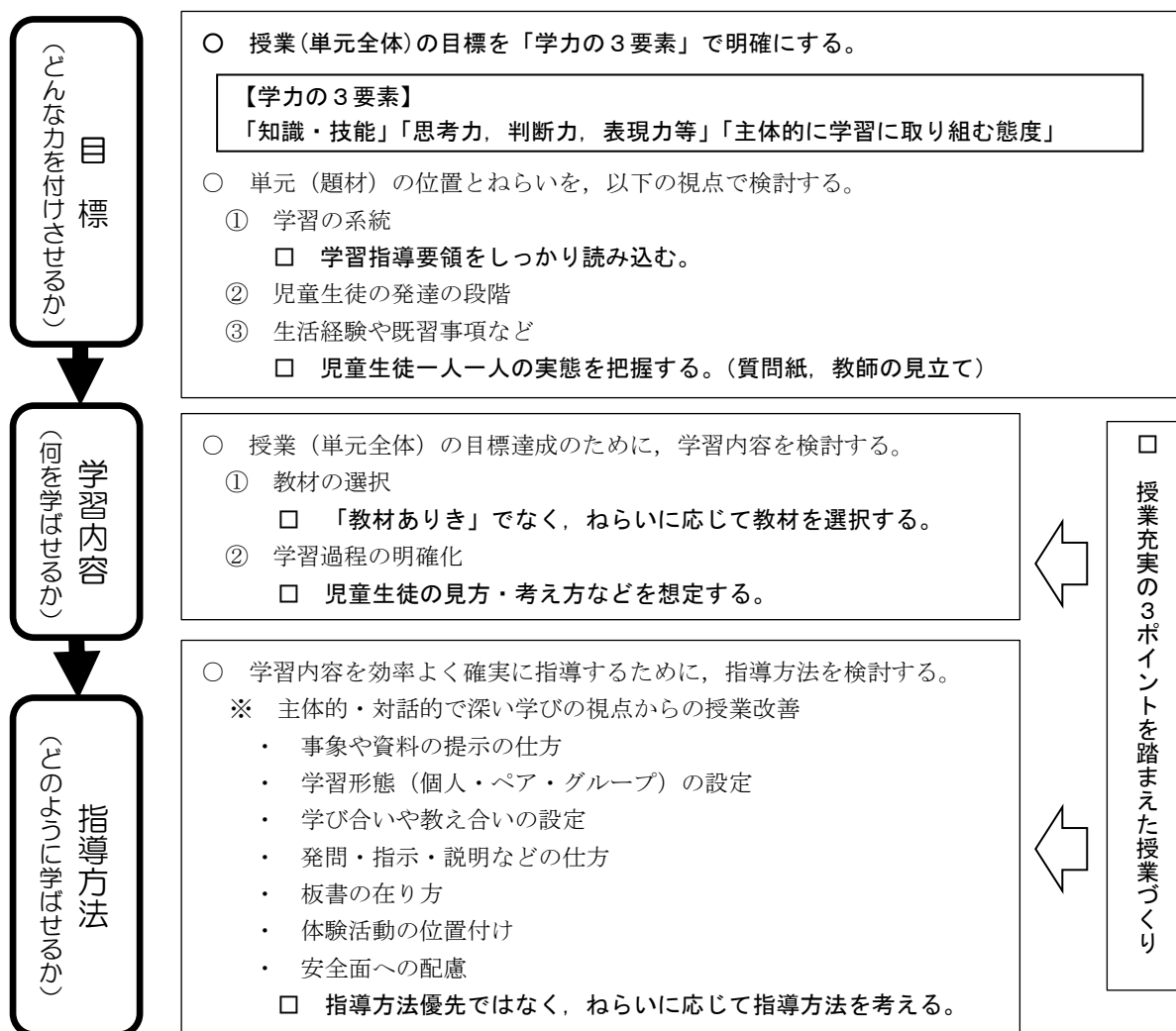
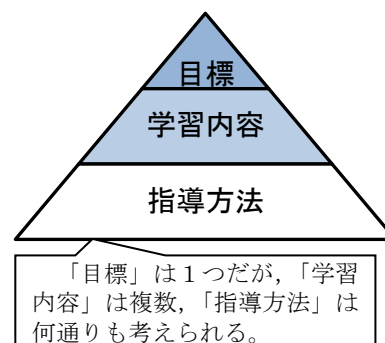
(ポイント3) 確かめ・見届け	<ol style="list-style-type: none"> <li>8 学習のまとめ                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「分かったこと, 知ったこと」などを可視化させる</li> </ul> </li> <li>9 習熟                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「分かったこと, 知ったこと」を一般化させる</li> </ul> </li> <li>10 振り返り(自己評価, 相互評価)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「分かったこと, 知ったこと」を振り返らせる</li> <li>・ 学び方を振り返らせる</li> </ul> </li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 児童生徒の考えを基に, めあてと対応したまとめの板書</li> <li>○ 個に応じた習熟・応用・活用問題の活用 (例: 諸調査の過去問題, Web システムの問題などをポストテストとして用いる)</li> <li>○ 自分の考えが変容した過程についての振り返り                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発表や書く活動で可視化させる</li> <li>・ どのようにして自分の考えが変容したか(例: 誰かの意見で, 対話によって, 発問で 等)を確認させる</li> </ul> </li> </ul>
-----------------	---	---

# I 「質の高い授業」の実現を目指して

## 1 授業づくりで大切にしたいこと

授業は、児童生徒一人一人が自らの課題を解決していく時間です。そのためには、授業を児童生徒一人一人が自ら学びとるスタイルにしなければなりません。また、児童生徒につけたい力が的確に児童生徒に身に付くように、どの教科等の授業においても、「目標」(ゴール)の設定をしっかりと行う必要があります。

その上で、「目標」→「学習内容」→「指導方法」の順で授業を構想することが、「目標」の達成につながります。



○ 学習内容を効率よく確実に指導するために, 指導方法を検討する。

※ 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

- ・ 事象や資料の提示の仕方
- ・ 学習形態(個人・ペア・グループ)の設定
- ・ 学び合いや教え合いの設定
- ・ 発問・指示・説明などの仕方
- ・ 板書の在り方
- ・ 体験活動の位置付け
- ・ 安全面への配慮

指導方法優先ではなく, ねらいに応じて指導方法を考える。

## 2 「質の高い授業」とは

前述のような授業をより質を高めて行うには、児童生徒の「分りたい」「解決したい」という問題意識がより高まる『児童生徒主体の授業』でなければなりません。

大島地区では「質の高い授業」を次のように定義しています。

**「授業充実の3ポイント」を踏まえた、児童生徒が自ら学びとる授業**

## Ⅱ 授業充実の3ポイント

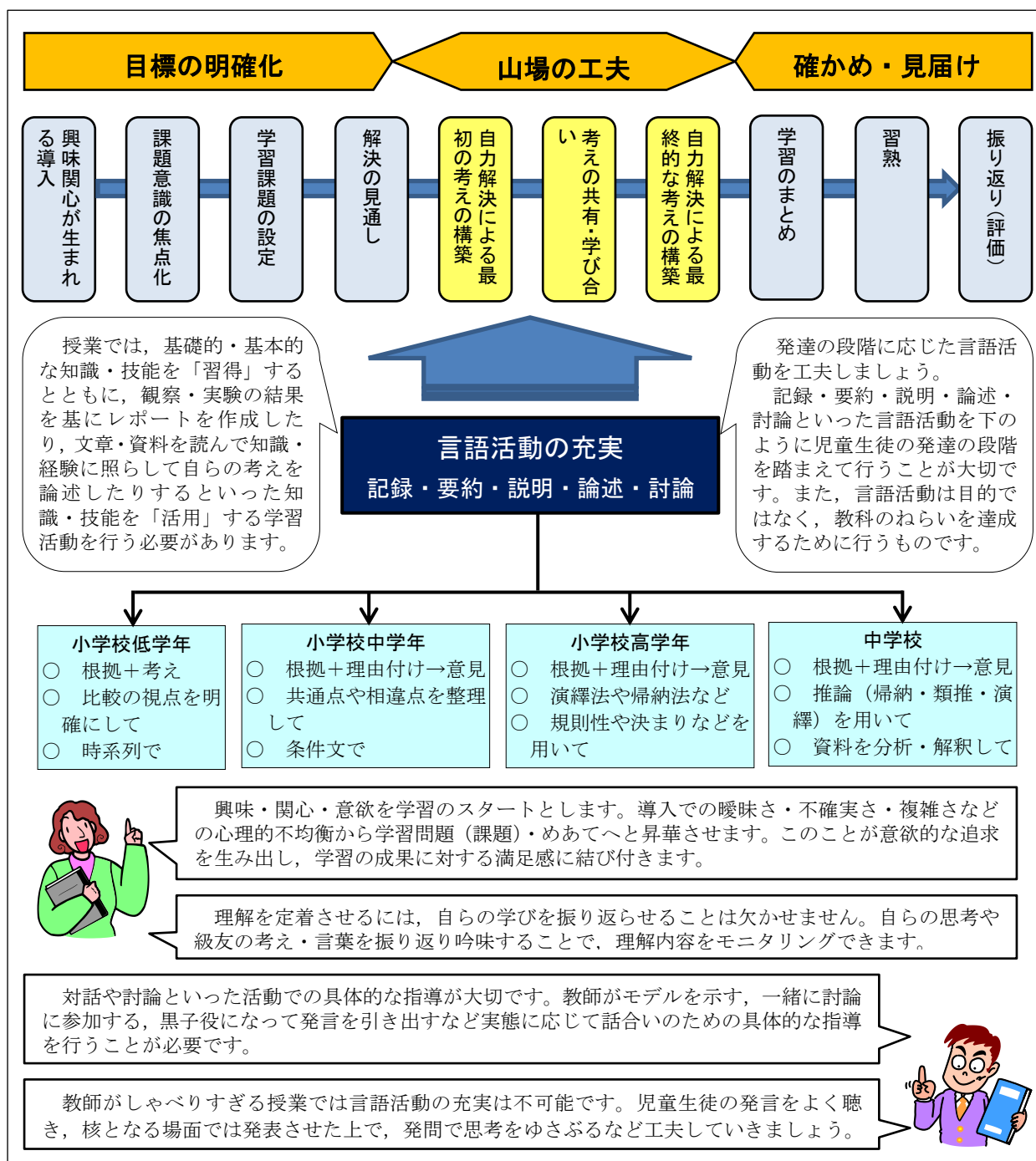
児童生徒に「確かな学力」をつけるためには、日々の授業を「児童生徒が学びとる授業」へと質的に向上させる必要があります。

目指したいですね、「授業充実の3ポイント」を生かしたこんな授業！



- 学習内容への「興味・関心が高まる魅力ある授業」
- 比較や対話を通して新たな考えに気付く、「発見や感動がある授業」
- 思考したり、表現したりする場面が設定され、「考えを深め合える授業」
- 級友との「連帯感を深め、学びをメタ認知できる授業」

この4つのことは「授業充実の3ポイント」として次のようにまとめることができます。



# ポイント1 目標の明確化 ～課題を生み出す

## 課題づくりの視点

- 1 驚き・意外性・矛盾
- 2 日常生活との関連
- 3 五感をとおして
- 4 感動・イメージ化
- 5 体験的活動
- 6 教科(他教科等)の関連
- 7 難易度・困難さ

## 興味・関心が生まれる課題の条件

- 1 自らの既習の知識や概念との差による探究心のわくもの
- 2 親近感や真実感がわく身近な生活と関わるもの
- 3 五感に訴えるもの(見る, 聞く, さわる等)
- 4 イメージをふくらませる具体的なもの(実物, 模型, 映像等)
- 5 体験的活動によって必要感・必然性が感じられるもの
- 6 各教科等で身に付けた知識・技能を用いる必要があるもの
- 7 適度な困難さがあり, 挑戦心をくすぐるもの

## 興味・関心が生まれる導入

授業開始 10 分で、「ああ, 分からない。」「なぜだろう。」「早くやってみたい。」という葛藤・不思議・疑問・好奇心等を引き出し, 最終的なゴールへの見通しをもたせることが大切です。長引かせるのは逆効果です。

- ・モデルを提示する。
- ・ICTを効果的に活用する。

## 課題(問題)意識の焦点化

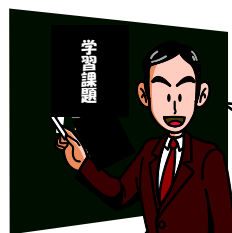


「分からないこと・知らないこと」を絞り込ませるために, 次のような活動を設定します。

- 1 実際に問題を解く。
- 2 答えを直感させる。
- 3 体験活動(役割演技をする, 実演するなど)を行わせる。

## 学習課題(問題)・めあての設定

## 疑問形での板書



**【分からないこと・知りたいことの可視化】**  
学習課題(問題)やめあては板書することが大切です。そのことが児童生徒の学習意欲を高めることや課題意識の持続につながります。

## 学習課題(問題)・めあての例

- 1 バラエティー番組とニュース番組とでは, 言葉遣いにどんな違いがあるのだろうか。(小:国語)
- 2 「高瀬舟」にもう一つの題名をつけたら, どのような題名がよいだろうか。(中:国語)
- 3 ふくれ菓子の3人分のレシピを基に8人分のふくれ菓子を作るときの材料はどれだけになるか。(小:算数)
- 4 アルファベットを根拠をはっきりさせて二つのグループに分けるとどうなるだろうか。(中:数学)

## 解決の予想と見通し

# ポイント2 山場の工夫 ～思考を深める

- 「思考」を深める視点
- 1 自分なりの考え
  - 2 仲間と学ぶ
  - 3 言語活動
  - 4 教師の発問・言葉かけ
  - 5 学習形態
  - 6 板書



- 「思考」を深めるための工夫
- 1 集中する活動や体験（見る・聞く・考える・書く等）
  - 2 「分からない」「間違い」「失敗」を大切に考える学習
  - 3 記録・要約・説明・論述・討論等
  - 4 児童生徒の思考を深めたり、ゆさぶったりする発問等
  - 5 互いに理解状況等をモニタリングできる学習形態
  - 6 児童生徒の思考過程等が分かる板書

## 自力解決による最初の考え(仮説)の構築

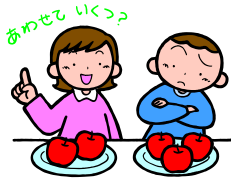
児童生徒の思考を深めるためには、教師が話す量を減らし、すぐに説明したり、解説したりしないことが重要です。

【最初の考えを可視化する工夫】  
児童生徒の思考力・判断力・表現力等を高めるためには、ねらいに即して「書く活動」を位置付けるなど「言語活動」を充実させる必要があります。



## 考えの共有(学びあい)

- 1 「分からないこと」を伝え合い、教えられたり、教えたりする。
- 2 級友の「間違い」「失敗」を認め、その誤りについて話し合う。
- 3 共通点や相違点を見つける。
- 4 考え方のずれに気付き、結論を導く。
- 5 級友の考えやこれまでの学習とのつながりを見つける。
- 6 級友の考えを参考に、自分の考えを広げたり、深めたりする。



- 発表・説明の工夫
- 対話・討論の工夫
- 教師の聴き方・発問等の工夫
  - ・ ゆさぶり発問, 切り返し等
- 学習形態の工夫
  - ・ コの字型, ペア, グループなど
- 板書の工夫



※ 「教師の聴き方」「発問等の工夫」「板書の工夫」等については後述参照

## 自力解決による最終的な考えの構築

【自分の考えが変容(強固・付加・修正)したことを確認させる】

ぼくの考えに〇〇さんの考えを付け加えると、分かりやすいなあ。

ぼくはAという考えだったけど、Bに変わったよ。



□□さんの考えを聞いて、今まで気付かなかった〇〇ということを思いついた。

# ポイント3 確かめ・見届け ～納得で締める

## 「習熟」を図る視点

- 1 学びの実感・感動
- 2 適用・習熟・一般化
- 3 振り返り
- 4 所属感・連帯感
- 5 次時への橋渡し

## 「習熟」を図るための工夫

- 1 学びの深まりや変容が実感できる学習のまとめ
- 2 知識・技能の適用や習熟を促し、深化・発展を図る活動
- 3 リフレクション ～ 思考過程の振り返り
- 4 学びの深まりと級友との関わりの発表
- 5 課題として残されたこと・新たな疑問の発表

## 学習のまとめ

集団の学びを個に返し、一人一人が学びの深まりを実感できるよう工夫することが大切です。



終わりの10分が勝負です。学習のまとめをとおして感動のある理解へつなげましょう。

### 【分かったこと・知ったことなどの可視化】

- 1 学習問題（課題）・めあてに対応して書かせる。
- 2 自分の考えがどのように変容したのか（例：誰かの意見で、対話によって、発問で 等）を書かせる。
- 3 条件や制限に応じて書かせる。
  - (1) 条件 ～ 字数、時間、人称、様式
  - (2) 制限 ～ キーワードの使用、構成、根拠と理由付け、引用

## 習熟

再学習  
適用・習熟問題 } 児童生徒同士の教え合い  
深化・発展問題 }

他の文章や問題で「できる喜び」を味わわせることが大切です。その際、児童生徒同士の教え合いを設定すると、理解が更に深まります。

- 日常生活に係る問題
- 新聞記事・他の文章・他の問題等
- 鹿児島チャレンジ、鹿児島ベーシック、かごしま学力向上支援 Web システム問題
- 過去問題（全国学力・学習状況調査、鹿児島学習定着度調査、高校入試問題等）

## 振り返り（自己評価、相互評価）

【「分かったこと・知ったこと」「学び方」を振り返らせる】

- 1 自らの理解過程・思考過程の振り返り
- 2 学びの深まりと級友との関わりの振り返り
- 3 課題として残されたことや新たな疑問の確認

一言感想や学習日記等で自分の考えや学びがどのように変容したかについて振り返らせる。



〇〇さんの発表を聞いて、ぼくはあっと思った。だって、ぼくが気付かなかった□□ページの××のところも重ねて考えていたのだから。なるほどなと思った。



### Ⅲ 授業を生き生きとしたものにする工夫

「納得するまで考え続けている。」「自分なりのやり方で解を求めている。」  
 「一言も発せず問題に取り組んでいる。」など、深く学ぶ児童生徒の姿は感動的です。そのような生き生きとした学びを創るために次のような工夫を心がけたいものです。



#### 1 児童生徒の具体的な表出された姿による目標の設定

授業を生き生きとしたものにするためには、目標を児童生徒の表出された具体的な姿でイメージすることが大切です。はっきりしたイメージがもてれば、学習状況の評価やそれに応じた指導がより充実した（指導と評価が一体化した）ものになります。

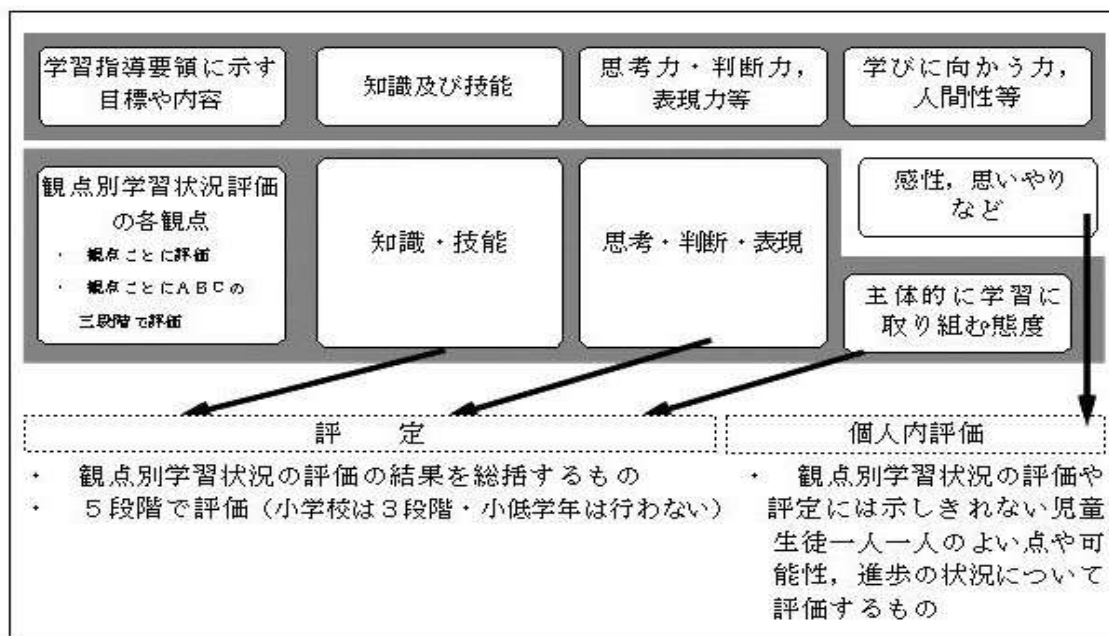
観 点	具体的な児童生徒の姿で表現した目標の例
知識及び技能	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ○○の変化について、△△のように説明することができる。</li> <li>2 ○○の表から△△の数値を読み取り、正しく指摘することができる。</li> <li>3 □□の資料から○○の表（グラフ）を作成することができる。</li> <li>4 ○○と△△の資料から、□□の特徴について説明する文章を書くことができる。</li> <li>5 優れた表現に気づき、その効果を考えながら朗読することができる。</li> </ol>
思考力・判断力・表現力等	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ○○の原因について、□□や△△のことと関連付けて、自分の言葉でグループ内で説明することができる。</li> <li>2 ○○の条件について、△△の視点から捉え、□□のように順序立てて説明することができる。</li> <li>3 ○○や△△に着目して、最も適切な解決方法について説明することができる。</li> <li>4 ○○や△△の共通点（相違点）を踏まえて、□□のことについて説明する文章を書くことができる。</li> <li>5 ○○の計算の仕方を考え、筆算形式にまとめた上で、具体物や図・絵を使って説明することができる。</li> </ol>
学びに向かう力・人間性等	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 一つの方法だけではなく、いろんな方法で答えを求め続けようとしている。</li> <li>2 具体的な生活場面で学習した○○を当てはめて、自分なりに説明しようとしている。</li> <li>3 自分のもっている知識・技能を用いながら、懸命に対話を継続しようとしている。</li> <li>4 ○○について関心を持ち、△△の役割について粘り強く追究している。</li> <li>5 途中であきらめずに解決方法を探して、自らの学びを振り返りながら粘り強く調べようとしている。</li> </ol>

## 2 指導と評価の一体化

### (1) 学習評価の基本的な考え方

- 児童生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価することで、学習したことの意義や価値を実感できるようにすることが大切です。
- 各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすることが大切です。

### (2) 各教科における評価の基本構造



### (3) 単元の目標と評価規準の例

【単元の目標】 ※小学校国語の例

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
比喩や反復などの表現の工夫や効果を理解することができる。	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。	言葉のよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。
		評価を通して見取ることができる部分
		評価や評定にはなじまない部分

【評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	個人内評価 主体的に学習に取り組む態度
比喩や反復などの表現の工夫とその効果を理解している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「読むこと」において、中心人物の気持ちの変化や物語の全体像を想像したり、表現の効果を考えたりしながら読んでいる。</li> <li>・ 「読むこと」において、読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げようとしている。</li> </ul>	進んで、中心人物の気持ちや物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりし、学習課題に沿って、考えたことを伝え合おうとしている。

### 3 机間指導の工夫

授業では、児童生徒自身が学びとっていく過程を大切にしたいものです。そのためには、まず、自力で課題解決に取り組ませることです。ただし、児童生徒によって理解の深さは違います。教師が児童生徒の学習状況に応じて適切なヒントを工夫することで、児童生徒の理解が深まっていきます。



#### (1) 目的をもった机間指導を実施する。

##### ア 児童生徒の思考を邪魔しない。

せっかく児童生徒が考えたり、活動したりしているのに、教師の指導が妨げになっては意味がありません。ゆっくりと歩きながら児童生徒の状況をつかみましょう。

##### イ 自力解決を大切にする。

自力解決の時間になると、さあ個別指導だといった感じになりがちです。でも、ちょっと待ってください。児童生徒自身が学びとっていくことが大切です。ですから、立ち止まったり、つまづいたりできる試行錯誤の時間をたっぷりと保障しましょう。

##### ウ 児童生徒の学習の状況をつかむ。

児童生徒の学習の状況をつかむには、視点を決めて注意深く児童生徒の様子を観察することが大切です。

例えば、作文の時間に同じように鉛筆が止まっても、書いたことが気に入らなくて悩んでいる、漢字やことばが思い出せずに悩んでいる、まったく書けずに悩んでいるなどの違いがあります。同じ文を何度も書いては消している、文中のある箇所でつまっている、長い時間鉛筆が止まっているなど、児童生徒の姿が学習の状況を教えてくれます。

#### (2) 児童生徒の状況に応じてヒントを出す。

児童生徒の状況をつかんだら、それに合わせてヒントを出します。

##### ア 座席の横でヒントを出す。

##### ヒントの例

- |                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| ア 絵や図を書き示す。      | イ パターンへ着目するよう助言する。    |
| ウ 整理されたリストを示す。   | エ 表を作成して考えるよう提案する。    |
| オ より簡潔な問題に直して示す。 | カ 再度実験する。             |
| キ 実際に演じる。        | キ もとに戻ってみよう促す。        |
| ケ 推論のきっかけを示す。    | コ 違う見方・考え方をするように指示する。 |

##### イ ヒントカード

- ・ 事前に準備したヒントカードを必要に応じて渡す。
- ・ 児童生徒のリクエストに応じてヒントを書いて渡す。

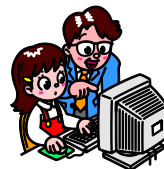
##### ウ ヒントコーナー

- ・ 掲示物を見たり、ミニ実験を行ったりしながら児童生徒が一人で考える。
- ・ 教師と対話しながら考える。

#### (3) 児童生徒の学習状況をその後の指導に生かす。

机間指導で把握した児童生徒の学習状況を次のように効果的に生かしましょう。

- ア 全体での共有やまとめの際に生かす
- イ 個々の補充指導に生かす
- ウ 授業の流れの軌道修正に生かす
- エ 単元全体の指導計画の修正に生かす



## 4 生き生きと対話させる工夫

対話の指導は難しいものです。対話がうまくいかない理由として、児童生徒が発言のチャンスを逸する、お互い言い放しで対話を十分に深められない、対話の交通整理ができないなどがあげられます。そこで、教師が次のような工夫をして活発な対話が行われるようにします。

### ペアやグループでの対話

自力解決後には、次のようなことに気を付けてペアやグループでの対話を設定します。

#### 1 「分からない。」を大切にさせる。

理解が進んでいない児童生徒の「分からないから教えて。」という援助要請に応じて教えることを大切にします。この利点は次のとおりです。

##### <理解が進んでいない児童生徒>

- 自らのリクエストに応じて教えてもらうので、お節介感を抱かない。
- 級友の説明なので分かりやすい。
- 級友からの説明なので、最後まで考えようとする。



##### <理解が進んでいる児童生徒>

- 説明するために自らの理解内容を振り返ることになる。
- 理解が進んでいない級友の反応に応じていろいろ説明することで自らの理解も更に深まる。

#### 2 自分の考えをもたせて参加させる。

自分の考えをもたなければ、ただ聞くだけになってしまいます。対話に入る前にしっかりとそれぞれの考えをもたせて参加させましょう。

### ペアやグループでの話し合い（討論・協議）

#### 1 ファシリテーターや黒子役になる。

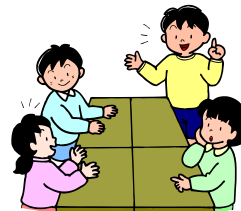
教師がファシリテーターや黒子役になって発言を促します。

- 「〇〇さんは、今のことをどう考えたの。」と直接的に発言をうながします。
- 「〇〇さん、今ですよ。」と小さい声で発言を引き出します。
- 頃合いを見計らって教師が背中を軽くたたくなどして発言のタイミングを教えます。
- ヒントカードを渡します。
- アイ・コンタクトで指示します。
- ハンドサインで知らせます。

#### 2 なりかわる。モデルになる。

ファシリテーターや黒子役になっていろいろなサインを送っても、児童生徒がうまく対話に参加できないことがあります。そんなときは、教師の出番です。

- その児童生徒になりかわって、その児童生徒のことばで発言します。
- その児童生徒になりかわって話し出し、残りを本人に引き継ぎます。
- グループの一員として発言して、児童生徒の発言をフォローします。



#### 3 対話を援護する。

ファシリテーターや黒子役になったとしても、対話がなかなか深まらない場合があります。

そのようなときには、教師が前面に立ってリードしたり、側面から援護したりします。

- 司会者に替わって対話を整理し、それを司会者にリレーします。
- グループの一員として発言して、対話を方向付けます。

## 5 教師の聴き方・発問等の工夫

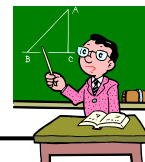
「教師が教え込む授業」から「児童生徒が学び取る授業」へ転換するための手立ての一つが「教師の聴き方」「教師の発問や言葉かけ」です。発問等によって、児童生徒の思考はゆさぶられ、より深いものとなります。また、児童生徒の発言の受け止め方、返し方によっても思考の深まりが違ってきます。そのような発問や言葉かけの基盤になるのが教師としての聴き方です。

### 教師の聴き方

- 1 待つ** 児童生徒の発言を待つ。沈黙の静けさに負けて、しゃべり出さない。
- 2 受容** 間違っただけでも、とにかく受け止めて聴く。
- 3 傾聴** 教師の想定外の発言が出てきてもすぐに反応しない。
- 4 関連 (相互)** 児童生徒の発言相互のつながりに着目して聴く。
- 5 関連 (教材)** 児童生徒の発言が教材文や学習内容とどのようにつながっているのか聴く。

### 思考を深める発問

- 1 解釈** これは、どんな意味だと思ふの。
- 2 類推** これまでの学習から、どんなことが言えそうかな。
- 3 比較 (対比)** 比べてみて、違いはどこかな。
- 4 転換** ○○ (の立場) になって考えたらどうなるか。
- 5 統合** これまでの意見をまとめてみるとどうなるかな。



### 全員に「主体的・対話的で深い学び」をさせるための発問の工夫

「主体的・対話的で深い学び」を意図して授業しているにもかかわらず、いつのまにか教師と一部の児童生徒のやりとりで終始してしまい、実際は大半の児童生徒が理解できていないというような経験はありませんか。

そのような場合、教師の発問に対して学習意欲や学力のある児童生徒が発表したら、他の児童生徒も同様に理解できていると教師が思い込んでしまっていることがあります。また、児童生徒の発表等に対し、「今の○○さんの発表は、△△ということだよ。これは～。」というように、教師が児童生徒の発表を長々と解説してしまうことによって、教師と発表した児童生徒のみが対話し、大半の児童生徒は教師が一方的に話した場合と大きく変わらない授業を受けてしまっていることがあります。

このような場合、教師がコーディネーター役になり追加的な発問を学級全体に投げかけると、学級全員の主体的な思考を促すことができます。

例えば、

「Aさんがやろうとしたことが分かる？」

「Bさんはどうしてこう考えたのか分かる？」

「～がよくわからないんだけど、説明できる？」

「Cさんの発表について、違ったり、付け足したりしたい人はいますか？」

「Dさんの発表について、どう思うかを隣の人と話し合ってください。」

というように、教師が児童生徒に発表を再度促したり、児童生徒同士で再考したりするような発問をする授業運びを心がけることが大切です。



## 6 振り返りのさせ方の工夫

優れた学び手は、自らの学習を俯瞰し、評価したり、調節したりしていると言われています。児童生徒の知識・技能等をより確かなものとするためには、日々の授業の中で児童生徒が自らの学習を振り返る場を設定することが大切です。その際、次に示すタイトル(見出し)づくり・一言コメント・三行感想・学習作文や学習日記などをおして、知識の獲得過程や理解過程を言語化させることが必要です。このことが深い理解や学び方を学ぶことに有効に働きます。

### 学習作文の例(理科)

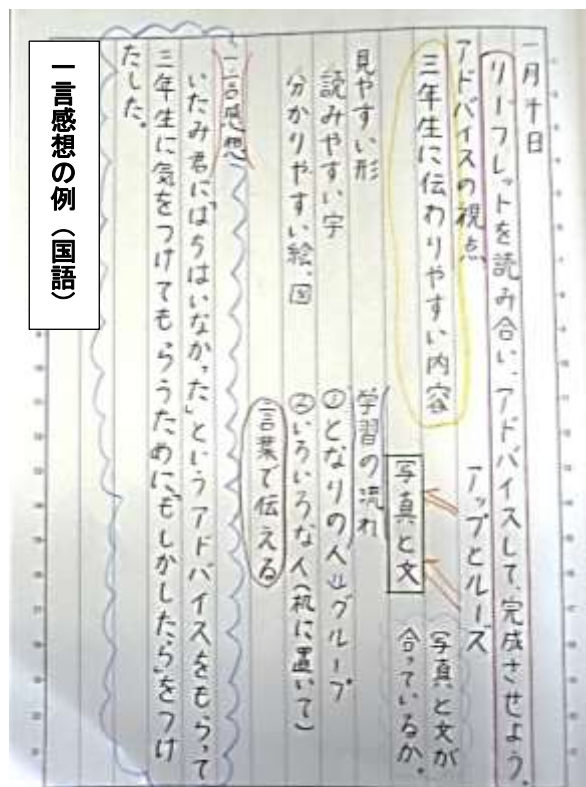
わたしは予想では……とっていました。  
はじめに……の実験(観察)をしました。次に、……実験(観察)をしました(実験・観察したこととその結果を詳しく書く)。

このことから(したがって、つまり)……ということが分かりました(はっきりしたこと、納得したこと、分かったこと、考えたことなどを書く)。

#### デンブンを変えるだ液のパワー

今日の理科の時間に、だ液の働きについて調べました。

はじめに、ごはんつぶを木綿の布に入れて40℃ぐらいのお湯の入ったビーカーの中でつぶしていきましました。次に、それを2本の試験管に入れて、一方にはだ液を入れました。10分ぐらいビーカーの中の40℃ぐらいのお湯につけて温めました。最後に、二つの試験管にヨウ素液を入れてみました。すると、だ液を入れた液は、だ液を入れなかった液と違って色が変わりませんでした。



## 教師も振り返り～授業リフレクション

### 「授業リフレクション」とは・・・

- リフレクションとは振り返りという意味であり、教師が自分の授業実践を反省的に考察する授業研究の方法です。

授業中に見られた児童生徒の様子(発言や態度、ノート等)から児童生徒の学びを解釈(「なぜ」その事実が起きたのかを考える)し、自分の授業を振り返る方法です。

#### ア 自己リフレクション

自分一人で自分の授業を振り返る方法です。思いつくまま振り返ります。よかったと思うこと、気になったことなどについて自分自身の見取りや児童生徒のノート、または、授業VTR等から考えます。

#### イ 対話リフレクション

2人から3人で対話をしながら進める方法です。参観者が、授業者に質問しながら、授業者自身の振り返りを促進します。

#### ウ 集団リフレクション

参観した教師と協働で実施する方法です。焦点化した場面について参観者が授業者に質問しながら、授業者自身の振り返りを促進します。

## 7 「書く活動」を重視した授業づくり

書くことは、それ自体が考えることであり、書くことによって自分の考えを整理したり、まとめたりすることができることから、基礎的・基本的な知識及び技能の習得はもとより、それらを活用して思考力、判断力、表現力等を育むことができる深い学びにつながる有効な手立ての一つです。知識だけを問う穴埋め式のワークシートのみを用いた授業では、思考力、判断力、表現力等は育ちません。

また、児童生徒に身に付けさせたい力を着実に身に付けさせるためには、スポーツと同じように身に付けさせたい力を育む活動を繰り返し行い、習熟させる必要があります。

そのため、日常の授業において自分の考えを書く活動を、指導過程に明確に位置付けるとともに、書く活動の活性化を図る指導を工夫することが大切です。

### (1) 「書く活動」の指導過程への明確な位置付け

#### 各指導過程における「書く活動」

##### 【導入】目標の明確化

- 学習課題（問題）・めあてを書く。
  - ・ 「分からないこと、知りたいこと」を可視化する。

##### 【展開】山場の工夫

- 自力解決による最初の考え（仮説）を書く。
  - ・ 最初の考えを可視化する。
  - ・ 根拠を基にした理由を書く。
- 自力解決による最終的な考えを書く。
  - ・ 最終的な考えを可視化する。
  - ・ 根拠を基にした理由を書く。

##### 【終末】確かめ・見届け

- 学習のまとめを書く。
  - ・ 「分かったこと、知ったこと」を可視化する。
- 振り返り（自己評価、相互評価）をする。
  - ・ 振り返りにおいて自分の考えが変容した過程を書く。

#### 各指導過程における「書く活動」を充実させる手立ての例

- 児童生徒が「最初の考え」を書くことがなかなかできない場合
  - ・ 教師が「最初の考え」をいくつか準備しておき、その中から選んで書かせる。
  - ・ 近くの児童生徒と話し合わせて、「最初の考え」づくりの参考にさせる。
- 児童生徒が「最終的な考え」を書くことがなかなかできない場合
  - ・ 他の児童生徒の意見や発表を想起させ、自分の考えに取り入れさせる。
  - ・ 「最終的な考え」を書くための言葉をいくつか示し、それらの言葉をつなげて書かせる。
- 児童生徒が「振り返り」を書くことがなかなかできない場合
  - ・ 板書やノートの思考過程を見直させ、どのような手順でゴールにたどり着いたか考えさせる。
  - ・ 書かせる内容を限定したり、キーワードや学習用語を示したりして書かせる。

## (2) 板書のポイント

### 学習のねらいと考えた道筋が分かり、児童生徒の理解や思考を助ける板書

- 日付や単元名、本時の目標や学習課題、学習の流れなどが書かれている。
- 一人一人の児童生徒が何をすればよいか分かるようになっている。
- 視覚を通して、学習内容やその要点を明確にし、焦点化できるようになっている。
- 級友とともに考えることを促すようになっている。
- 学習問題（課題）・めあて、児童生徒の考えの比較・関連・統合の過程、学習のまとめなどが囲み線・線・矢印を使って関係付けられている。
- 学んだことや身に付けたことを振り返ることができるようになっている。
- それぞれの考え方の根拠となったものが分かるようになっている。
- 児童生徒の言葉で書かれている。
- 児童生徒が思考過程をノートに記録することを考え、構造的になっている。
- 全体の児童生徒から見える大きさの字で書かれている。
- 色チョークや囲み枠、図式化、簡略化などの工夫がされ、変化が付けられている。

### 留意点

- ・ 児童生徒の発達段階に応じた大きさの文字を、正確で丁寧を書く。
- ・ 思いつきの板書ではなく、授業の展開に即した計画に基づく板書を心がける。
- ・ 児童生徒にとって分かりやすい整理された板書となるように心がける。
- ・ ノートに書かせる時間を、児童生徒の発達段階に応じて適切に設定する。
- ・ 児童生徒の発言に耳を傾け、その要点を板書に生かす。
- ・ 小黒板やカード、掲示物、プロジェクター等との併用を考慮する。
- ・ 文字や記号の正しい書き方を教える。
- ・ 図表・グラフ等のかき方を具体的に示し、児童生徒がかけるようにする。
- ・ 書いたり、貼ったりするだけでなく、ときには消したり、書き足したりしながら学習内容を理解させる。
- ・ 簡潔、明瞭、的確の観点から、それぞれのよさを明記する。
- ・ 児童生徒の考えは、小黒板やホワイトボードなどを利用して発表させる。
- ・ 小黒板等で取り上げる児童生徒の考えは、考えを類型化したものとする。

### 構造的な板書の例





### (3) ノート指導のポイント

#### 考えを深め、学びの足跡となるノート指導

- 日付や単元名、本時の目標や学習課題（問題）、学習の流れ等が書かれている。
- 自分で調べたことや考えたことが、教科の特性を生かした表現で書かれている。
- 自分の意見や感想とともに、他の児童生徒の意見などが書かれている。
- 吹き出しなどで、思ったこと、感じたこと、ひらめいたことなどが書かれている。
- 自分自身や他の児童生徒の考えのよさが書かれている。
- 課題に対しての自分のまとめが書かれている。
- 自分の意見が変わった思考過程が分かるように書かれている。
- 授業を振り返り、分かったこと、思ったこと、新たな課題などが書かれている。

#### 留意点

- ・ 児童生徒のノートを常に評価する。  
(必ずしも提出させなくても、机間指導の際に評価してもよい。)
- ・ 筆記用具の使用法を指導する。(特に、鉛筆の持ち方、鉛筆の濃さ、姿勢など)
- ・ 学習時に用いた印刷物やテスト問題、ワークシートなどはノートに添付したり、別ファイルに綴じさせたりする。
- ・ 他の児童生徒の考えと比較して、気付いたことや疑問点、よさなどを自由に付け加えられるようにする。
- ・ ノートの基本的な書き方が身に付いたら、「自分なりに工夫したノート」をつくることができるようにする。
- ・ 自分の考えを確かめるために、他の方法での考えを書くことができるようにする。

#### 【引用・参考文献】

- 「学習指導要領解説総則編」 平成29年 文部科学省  
「言語活動の充実に関する指導事例集」 平成24年 文部科学省  
「学びの羅針盤」 平成27年 平成30年 鹿児島県教育委員会  
秋田喜代美「教師の言葉とコミュニケーション」 平成22年 教育開発研究所  
秋田喜代美「学びの心理学 授業をデザインする」 平成24年 左右社  
石井 順治「教師の話し方・聴き方」 平成22年 ぎょうせい  
大村 はま「教室を生き生きと1・2・3」 平成6年 筑摩書房  
北 俊夫「言語活動は授業をどう変えるか」 平成23年 文溪堂  
佐藤 学「教師たちの挑戦」 平成15年 小学館  
佐藤 学「学校の挑戦」 平成18年 小学館